

夢十夜

なつめ そうせき
夏目漱石
なつめ そうせき

こんな夢を見た。

腕組をして枕元に坐っていると、仰向に寝た女が、静かな声でもう死にますと云う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の柔らかな瓜実顔をその中に横たえている。真白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇の色は無論赤い。とうてい死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますと判然云った。自分も確にこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗き込むようにして聞いて見た。死にますとも、と云いながら、女はぱっちりと眼を開けた。大きな潤のある眼で、長い睫に包まれた中は、ただ一面に真黒であった。その真黒な眸の奥に、自分の姿が鮮に浮かんでいる。自分は透き徹るほど深く見えるこの黒眼の色沢を眺めて、これでも死ぬのかと思った。それで、ねんごろに枕の傍へ口を付けて、死ぬんじゃないかなうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。すると女は黒い眼を眠そうに睜たまま、やっぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云った。

じゃ、私の顔が見えるかいと一心に聞くと、見えるかいつて、そら、そこに、写ってるじゃありませんかと、にこりと笑って見せた。自分は黙って、顔を枕から離れた。腕組をしながら、どうしても死ぬのかなと思った。

しばらくして、女がまたこう云った。

「死んだら、埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘って。そうして天から落ちて来る星の破片を墓標に置いて下さい。そうして墓の傍に待っていて下さい。また逢いに来ますから」

自分は、いつ逢いに来るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。――

赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、

――あなた、待っていられますか」

自分は黙って首肯した。女は静かな調子を一段張り上げて、

「百年待っていて下さい」と思い切った声で云った。

「百年、私の墓の傍に坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」

自分はただ待っていると答えた。すると、黒い眸のなかに鮮かに見えた自分の姿が、ぼうっと崩れて来た。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと

ゆめじゆうや 夢十夜

なつめ そうせき
夏目漱石
なつめ そうせき

こんな夢を見た。

腕組をして枕元に^{すわ}坐っていると、^{あおむき}仰向に寝た女が、静かな声でもう死にますと云う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の^{りんかく}柔らかな^{やわ}瓜実顔をその中に横たえている。真白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、^{くちびる}唇の色は無論赤い。とうてい死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますと判然^{はつきり}云った。自分も確^{たしか}にこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から^{のぞ}覗き込むようにして聞いて見た。死にますとも、と云いながら、女はぱちりと眼^あを開けた。大きな潤^{うるおい}のある眼で、長い睫^{まつげ}に包まれた中は、ただ一面に真黒であった。その真黒な眸^{ひとみ}の奥に、自分の姿が鮮^{あざやか}に浮かんでいる。

自分は透^すき徹^{とお}るほど深く見えるこの黒眼の色沢^{つや}を眺めて、これでも死ぬのかと思った。それで、ねんごろに枕^{そば}の傍へ口を付けて、死ぬんじゃないだろうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。すると女は黒い眼を眠^みそうに睜^{みはつ}たま、やっぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云った。

じゃ、私の顔^{わたし}が見えるかいと一心^{いつしん}に聞くと、見えるかいて、そら、そこに、写ってるじゃありませんかと、にこりと笑って見せた。自分は黙って、顔を枕から離した。腕組をしながら、どうしても死ぬのかなと思った。

しばらくして、女がまたこう云った。

「死んだら、^う埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘って。そうして天から落ちて来る星の破片^{かけ}を墓標^{はかじるし}に置いて下さい。そうして墓の傍に待っていて下さい。また逢^あいに来ますから」

自分は、いつ逢いに来るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。——赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、——あなた、待っていられますか」

自分は黙^{うなず}って首肯いた。女は静かな調子を一段張り上げて、

「百年待っていて下さい」と思い切った声で云った。

「百年、私の墓^{そば}の傍に坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」

自分はただ待っていると答えた。すると、黒い眸^{ひとみ}のなか^{あざやか}に鮮かに見えた自分の姿が、